

# 徳島・常三島遺跡

じょうさんじま

1 所在地 徳島市南常三島町二丁目

2 調査期間 一 総合情報処理センター新築 一九九七年（平

9）三月～六月、二 共同溝敷設 一九九九年七月～二〇〇〇年五月、三 共通講義棟二期工事

二〇〇一年三月～六月

3 発掘機関 徳島大学埋蔵文化財調査室

4 調査担当者 北條芳隆・橋本達也・中村 豊

5 遺跡の種類 城下町跡（武家屋敷）

6 遺跡の年代 江戸時代（一八世紀～幕末主体）

7 遺跡及び木簡出土遺構

の概要

遺跡は徳島城の北端を流

れる助任川を挟んで、城の

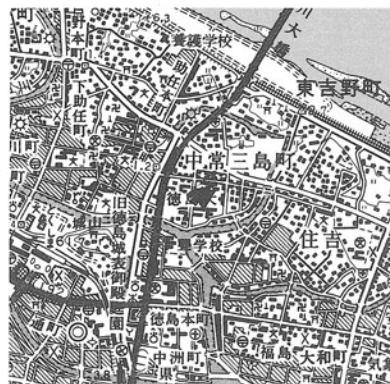
北東に位置する。調査はい

ずれも徳島大学工学部の施

設工事に伴うものである。

常三島は、蜂須賀入部以

来一七世紀初頭頃までは、



（徳島）

舟入として利用され、阿波水軍の根拠地とされていたと伝えられており、干潟のような様相を呈していた。その後、元和元年（一六一五）の一国一城令など諸般の事情により武家屋敷地が必要となり、この地は新たに武家屋敷地として整備されることになる。したがって、遺構はこの時期以降となるが、遺物は一八世紀後期から一九世紀にかけてのものが多く、木簡出土遺構の時期は整理途上のため決定しがたいが、右の間に使用・廃棄されたことは間違いない。

調査の結果、屋敷地内からは多数の遺構が検出され、屋敷境を区画する用排水路からは多数の木製品が出土した。この溝は、それまで小規模であったものを、一八世紀後半に洪水対策として二条の大規模な溝に造り替えたものである。一の調査区では幅約二m深さ約〇・五mほどであるが、二及び三の調査区では、復原幅四m以上、深さ約一・五mの大規模なものであった。なお、遺跡はもともと干潟を造成した土地であるため、今日でも地下水位が高く、概して木製品の残存状況は良好である。

木簡は、一の調査で一点、二の調査で九点、三の調査で一点出土した。今回はその中から判読可能な各調査区一点ずつ計三点を紹介する。木簡が出土した遺構は、一の調査の一点が土坑であるほかは、全て前述の屋敷境の溝である。木簡出土遺構の時期は整理途上のため決定しがたいが、木簡も武家屋敷地成立後の一八世紀後半から一九世紀にかけての間に使用・廃棄されたものとみられる。

8 木簡の釈文・内容

一 総合情報処理センター新築

(1)  $\overline{\text{み}}^{\cdot}$  か

か  
さ  
7  
田  
こ

月かも  
の

七

73×43×3 061

板目材を上下左右とも丁寧に切断し、長方形に仕上げている。かるた小倉百人一首の七番、阿倍仲麿の取り札である。

## 二 共同溝敷設

(1) 「民沢作右衛門様」 山本三太郎

塩鱈式□書狀箱添

196×46×5 011

板目材で、上下とも切り折り。荷札木簡と思われる。屋敷を区画する溝からの出土である。出土地は、寛政八年（一七九六）の『御山下絵図』によると、代々医師の家柄である佐野玄真の屋敷にあたり、木簡に記されている「民沢作右衛門」は、道路を挟んで東側に隣接する屋敷主である。これは、隣家からの投棄というよりも、何らかの事情により、周辺を整地した際に紛れ込んだものではなからうか。

三 共通講義棟二期工事

(1) 助

80×60×3 011

板目材を上下左右とも丁寧<sup>ていねい</sup>に切断し、長方形に仕上げている。助の一字<sup>ひと</sup>が大きく記されている。

なお、釈読にあたっては、徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏のご教示を得た。

(中村 豊)